

令和8年度 キンメダイ太平洋資源評価会議 議事概要

日程：令和8年8月4日（火） 10：00～12：00

会場：水産研究・教育機構 水産資源研究所 横浜庁舎講堂（ハイブリッド形式）

概要：

水産研究・教育機構（以下、水産機構）の資源評価担当者により、キンメダイ太平洋を対象として、令和8年度の資源評価報告書案が説明された。会議出席者による検討・議論の結果、資源評価報告書案は承認された。資源評価報告書は議事概要（本文書）とともに、資源評価会議名で水産庁に提出されるほか、一般に公開される。

令和8年度資源評価案の説明・検討

- ✓ これまでの経緯として、資源管理、評価に関するこれまでの取り組み、2022年12月に開催された資源管理手法検討部会後の水産庁からの対応依頼とそれに対して今後検討すべき課題などについて説明をした。
- ✓ 今年度の変更点等として、報告書様式の変更、データ修正・追加、昨年度変更した最新年の漁獲係数（F）推定のための選択率平均年数における解釈の追記、地区ごとに別々に作成していた CPUE 標準化に関する文書の統合を行ったことを説明した。
- ✓ 2025 年においては、F は引き続き低水準である一方、2～3 魚の年齢別漁獲尾数が沿岸の地区を中心に増加した。
- ✓ 2025 年の標準化 CPUE は多くの地区で過去最高に近い水準であった。また、黒潮大蛇行期間中は標準化 CPUE がノミナル CPUE より高い傾向にあった一方、4 月に大蛇行が終息し、ノミナル CPUE に近づく、もしくは逆転する地区も出始めており、標準化 CPUE において黒潮流路等の海洋環境情報を加味することの重要性が改めて確認された。
- ✓ 評価案説明の中で、有識者の事前コメントを受けた大蛇行終息後の各都県の状況報告が行われた。東京都などで漁況変化は小さい一方、千葉県では小型魚の漁獲が増加していることに加え、東京湾口部で大蛇行前に利用していた漁場が再形成されていること、静岡県では伊豆半島東岸において北側から順に大型魚が出現し始めたこと等が報告された。神奈川県では東京湾口部で潮流の向きが変化したことにより、漁場が移動したこと、愛知県では沖合底びき網（沖底）でこれまでより大型の魚が漁獲されるようになったこと、高知県では室戸海域の不漁が継続する一方、足摺海丘で比較的好漁になってきたことが報告され、大蛇行終息後は状況が地区により異なることが共有された。また、各地の漁場周辺におけるイルカやサメの出現状況等についても情報提供があった。
- ✓ 資源評価で推定された 2025 年の親魚量(29.7 千トン)は、MSY を実現する親魚量(SBmsy, 24.3 千トン)を上回った (1.22 倍)。また、2025 年の漁獲圧は、SBmsy を維持する水準を下回った (0.66 倍)。
- ✓ 加入量（2 歳魚資源尾数）は 2023 年以降大きく増加、2025 年は 1,685 万尾と推定されており、各地の漁獲状況や参画機関による調査結果とも整合する一方、本資源の加入量推定は不確実性が高いため、今後の若齢魚の動向に注意する必要がある。一方、こうい

った不確実性への対応として、時空間情報を加味した沖底CPUEの標準化と、沖底CPUEを若齢資源の指標とした資源量の試算について検討を進めていることを説明し、参画機関と議論を行った。

- ✓ 参画機関からは、引き続き沖底情報の導入に向けた検討を進めてほしいとの要望が多く挙がる一方、漁場内の地形が複雑で空間的に狭い範囲で操業状況が異なることからデータを扱う上では注意深い検討が必要との意見や、沖底漁場以外の指標についても引き続き検討を進めるべきとの意見があった。
- ✓ その他今後に向けた課題に関する議論において、参画機関から、資源評価の周辺情報として、各都県から報告のあった漁獲状況の変化を説明するための資源の漁場間での移動等を捉えるための調査や分析を進めることが重要であるとの意見や、本資源については漁獲加入に至るまでの初期生態に関する情報が乏しいため、そこを補完し、加入量推定の不確実性の解消に寄与する生態研究を、各機関協力のもと進めていきたいとの要望が挙げられた。加えて、本資源で使用する再生産関係についても、引き続き検討を行うべきとの意見があった。

有識者講評：

- ✓ 関係者間で活発な情報交換が行われ、資源評価案が円滑に承認されたことを評価する。今年度、新たな情報を加えたことによる大きな変化はなかった一方、黒潮大蛇行終息後の漁場変化や操業環境の影響は地域間で異なり、CPUEの年トレンドにも地域差があると感じるため、本日のような情報共有の重要性を痛感した。今後も関係者で協力してより良い資源評価をしていただきたい。

その他

- ✓ 特になし

以上